

パーソナル・プロジェクト ーレイニー高校訪問を通してー

大阪府立守口北高等学校 教諭 敷田 富治美

(1) はじめに

アメリカ合衆国へは、ちょうど私が30歳だった時に、西海岸（カリフォルニア州）と中部（テキサス州・ルイジアナ州・フロリダ州）を3週間ほど旅したことがあったが、東海岸は初めてであり、ましてや高校訪問となるとまったく未経験であった。しかし幸いにも、昨年度この G. P. S. P. を通じて、ホガード高校に3日間、レイニー高校に1日間、そしてニューハノーバー高校に半日間訪問した同僚がいたので、いろいろアドバイスを受けながら、また、校内に立ち上がったばかりの国際交流委員会のメンバーにも協力してもらい、とにかく訪問予定先のレイニー高校の生徒及び教職員の方々に、守口北高校並びに芦間高校についてよく知ってもらうことを最優先に位置づけ、可能ならば、姉妹校提携に繋げていきたいという思いで、準備を進めていった。この趣旨から、以下に示すような活動及び研究プランを立て、実行に移した。

なお、本校は大阪府の全日制府立高等学校特色づくり・再編整備第1期実施計画第2年次実施対象校であり、平成14年度より新入生の募集を停止し、そして、今年4月、守口高等学校及び本校の統合整備により、新たに本校の校地校舎において、総合学科の芦間高等学校が開校したことを付記しておく。

(2) 活動及び研究プランの概要

①守口北高校及び芦間高校の紹介及びレイニー高校のカリキュラム研究

芦間高校の生徒が司会を務めるプロモーションビデオ（English version）や守口北高校の学校行事紹介ビデオ（Japanese version）、守口北高校及び芦間高校の年間行事予定表（English version）、芦間高校（総合

学科）のカリキュラム表並びにシラバス（Japanese version）等を持参し、守口北高校と芦間高校の概要について理解してもらう。なお、参考までに、日本で発行されている英語（Oral Communication I）、数学（数学 I）及び情報処理の教科書を持参する。また、レイニー高校での授業観察を経て、そのカリキュラムの中から、守口北高校及び芦間高校に持ち帰って活用できそうと思われる科目について、詳細に説明を受け、その把握に努める。

②守口北高校及びレイニー高校における国際交流に関するアンケート結果の比較

守口北高校で実施した「国際交流に関するアンケート」の中からそのいくつかの項目について、レイニー高校においてもアンケートを実施し、両者の結果を比較・検討する。

③学校改革へ向けてのキーポイントの研究

レイニー高校が、1999年度と2000年度の2年間にわたって、a "NC Exemplary School" に選ばれ、また、2001年度にはノースカロライナ州の高校の中でわずか2校にしか与えられていない a "Hallmark School of Excellence" に選ばれた経緯について教えを請い、学校改革へ向けてのキーポイントについて学ぶ。





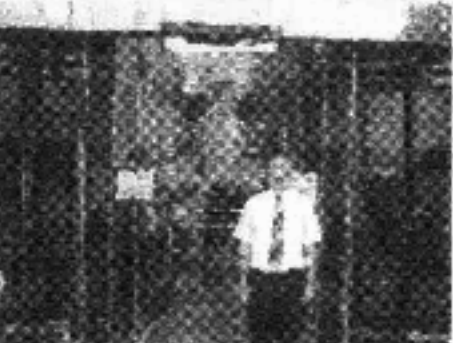
④20年以上昔の米国等の教科書における日本文化紹介記事と、現在のそれとの比較

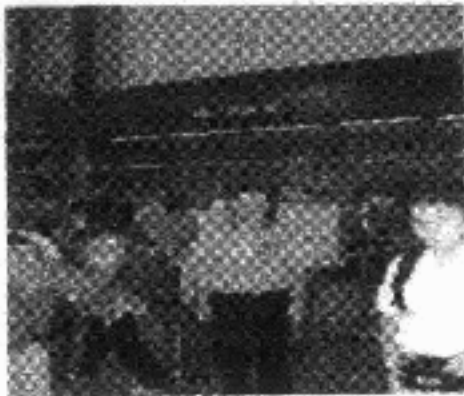
レイニー高校で使用されている教科書における日本関連の記事や、図書館に収められている日本に関する教育資料を見せてもらい、約20年前（1983年）に日本で発行された「海外の教科書にみる異国ニッポン・グラフィティ」の記述と比較・検討し、この20～30年間における日本文化の紹介に関する変化について考察する。

⑤現地調査の日程

日	場 所	内 容	備 考
8/17 (土)	移動	関西国際空港から約12時間のフライトの後、デトロイト空港到着。そこから国内線に乗り換えて1時間30分でラレーへ。途中夕食をとり、コーストライン・インに、午後11時30分に到着。	Dr. Brad Walker 
8/18 (日)	Office DEPOT UNCW Wrightsville Beach	オフィス・デポへ寄ってから、ドクター・ブラッド・ウォーカー先生がお勤めのUNCWをしばし見学。その後、ライツヴィル・ビーチへ。ここで日米どちらの生徒がより自立しているかという論争(?)が始まる。	Dr. Brad Walker 
8/19 (月)	Williston Middle School Gregory School Ashley High School	午前中にウィリントン・ミドル・スクールとグレゴリー・スクールの2校を、そして午後にアシュレイ・ハイスクールを訪問。小・中・高を問わず、学校施設及び授業規模の違いには歴然としたものがあつた。また、児童・生徒に対する管理体制が徹底している点も日本との大きな相違点と言える。	William Hatch Laura Holliday Joanne Absi 
8/20 (火)	Laney High School	午前中は、ドクター・リック・ホリデイ校長先生に挨拶に伺った後、シニア・プロジェクトの授業を見学。学校と地域社会が協力して生徒を育成する、日本にはないユニークな授業である。続いて、重い障害を持つ生徒たちを対象とした授業を見学した。午後からは、クリエイティブ・ライティング、化学、地球科学の3つの授業見学の後、芸術棟並びに体育施設を中心に見て回った。総じて、積極的、意欲的に取り組む生徒たちの姿が印象に残った。諸先生方はもちろん、案内役を務めてくれた生徒 (Michael Highland君) にも大変お世話になった。	Rick Holliday Brenda Olson Lou Cannon Scott Crouch Sherry Niven Colin Taper Angel Cavender Alan Boyd Russ Adams 

8/21 (水)	Laney High School	<p>第1時限のウッド先生の数学の授業で、国際交流に関するアンケートを実施。その後、別の数学やコーラスの授業を参観。スペイン語や、教員志望の生徒対象のティーチャー・カデットのクラスでは、守口北高校の事柄を中心に多くの質問を受けた。昼食時には、アダムズ先生とホールデン先生に、レイニー高校の生徒たちの飛躍的な学力向上の秘密について尋ねた。午後はグリーン中佐のROTCの授業に参加した後、英語科の3人の先生方の授業を見学した。最後のリッチ先生の12年生を対象としたシニア・プロジェクトの授業では、完成に至るまでの各段階の取り組みについて説明を受けるとともに、できあがったポートフォリオを見せてもらった。</p>	<p>Brenda Olson Angel Cavender Deidre Wood Sharon Sterken Greg Taylor Irene Lucas Richelle Dombroski Russ Adams David Holden Lt. Colonel Gary Green Jackie Nichols Peggy Price Lora Rich</p> 
8/22 (木)	Laney High School	<p>米川先生、森田先生と、ホリデイ校長先生との間で、姉妹校提携の内諾が成立した。私はマッカーティー先生の新聞発行の授業に出向き、さまざまな事柄についてインタビューを受けた。この後、シニア・プロジェクトやレイニー高校における人権教育の現状について英語科のプライス先生から教えて頂いた。また、ノヴァ・ネットという、単位が取れなかった生徒対象のユニークな授業も観察。そして、午前中最後に、ケリー先生からもシニア・プロジェクトについてレクチャーを受けた。午後は、世界史と世界の宗教の授業を見学。</p>	<p>Rick Holliday Brenda Olson Angel Cavender Karen Mccarty Peggy Price Judy Martinez Richelle Dombroski Carol Query Max Fryar</p> 
8/23 (金)	Coastline Inn Teacher's Aid Pig Picking Laney High School's Ground	<p>午前中8時から12時まで、ホテルでサマリー会議の準備をしてから、郵便局や、教具などを扱っているTeacher's Aidへ寄って、その後ビッグ・ピッキング会場へ。5時30分にパーティーを終え、レイニー高校でフットボール観戦を楽しんだ。</p>	<p>Dr. Brad Walker</p> 

8/24 (土)	Battleship North Carolina Cape Fear Museum Mr. & Mrs. Olson's house Mr. & Mrs. Nystrom's house	私のホスト・ファミリーのナイストロムご夫妻と、森田先生、藤本先生のホスト・ファミリーのオールソン先生ご夫妻の7名で、戦艦ノースカロライナ号を見学し、午後からは、ケープ・フィア博物館を訪れた。この博物館内には the Michael Jordan Discovery Galleyがあった。	Mike & Pat Nystrom Richard & Brenda Olson 
8/25 (日)	移動	ホスト・ファミリーのナイストロムご夫妻に集合場所のUNCWまで送って頂き、そこからラレーへ移動。ホテルに到着後、すぐ翌日のサマリー会議の準備に取りかかった。	Mike & Pat Nystrom Dr. Brad Walker
8/26 (月)	Exploris	午前9時20分から、広島地区、大阪地区、鳴門地区の順にサマリーを発表。持ち時間は、各地区40分。大阪地区は、全員で協力して1つの発表にまとめた。テーマは、 1. 子供は子供 (Kids are kids.) 2. しっかりしてまっか? (Dependent or independent?) 3. 何目指すん? (What is focused in the education?) 午後の2時15分から、八尾市立東中学校とトップセイル・ミドル・スクール、本校とレイニー・ハイスクールが、それぞれ姉妹校提携の仮調印を行った。	Dr. Donald Spence Dr. Carolyn Ledford Dr. Brad Walker Dr. Lois Mwaniki  
8/27 (火)	Exploris Middle School Exploris Museum Museum of History- Museum of Natural Sciences State Department of Public Instruction	9時過ぎに、チャータースクールであるエクスプロリス・ミドル・スクールに着いた。8年生のマリアとハンナが校内を案内してくれた。ここには、高校のシニア・プロジェクトに近い、エグジット・プロジェクトという講座が設けられているようだ。午後には、ノースカロライナ州教育委員会事務局を訪問し、係の方から、教科書を含めた教材全般の選定システムについて、また、ホームページにアクセスして、カリキュラムを調べる方法を教えて頂いた。	Dr. Brad Walker  

8/28 (水) 8/29 (木)	移動	午前5時30分にホテルのロビーに集合して、ラレー空港へ向かった。そこからデトロイト空港を経由して、日本時間の8月29日(木)午後2時50分に、関西国際空港に到着した。	Dr. Brad Walker 
----------------------	----	---	--

(3) 研究の結果と考察

①シニア・プロジェクト

レイニー高校のカリキュラムの中で、一際興味を引き、守口北高校や芦間高校のカリキュラムの中に何とか取り込めないか、あるいは完全な形で取り込むのは難しいとしても、部分的にでも生かすことができないかと思ったのは、ノースカロライナ州の高等学校で3年前に誕生したと言われる、シニア・プロジェクトという授業科目であった。

これは日本の大学における卒論研究に近い科目と言えるが、英語科の教員と、メンターと呼ばれるプロジェクトのテーマに沿って選ばれた教員と、地域社会の人々が協力し合って指導・評価を行うシステムを採っている。

1) ねらい

英語科のプライス先生によると、シニア・プロジェクトのねらいは、まず、生徒たちがコミュニティーの中にある施設でも、製品でも、あるいはコミュニティーの中で起こった出来事でも何でもよいから、とにかく地域社会に関心を持つことにあるらしい。また、プロジェクトに取り組む過程において各自の研究の意味づけを行う中で、論理的思考力の伸長を図ることもねらいの中に含まれていると言う。

2) 構成

1. テーマを選び、リサーチ・ペーパーを書く。

テーマは職業、趣味、技能、社会問題、環境問題、健康など、自分が興味・関心を抱いたものなら何でもよいが、生徒自身が選ぶことが前提条件となる。リサーチの手段は、インタビュー等の直接的なものが1つ、インターネットが1つ、他に、雑誌などの付加的な手段が4つと定められている。なお、万一、リサーチ・ペーパーが盗作と判明した場合は零点になるという規

定が設けられている。

2. リサーチ・ペーパーに関連した作品へと発展させる。

第2段階として、生徒は、自らの手でリサーチ・ペーパーに基づいた作品を創り上げることを要求される。ここで言う作品とは、方向性としては、技能の実演であったり、作品の製作であったり、職業研究であったりするわけだが、いずれにせよ、生徒自身の直接体験に根ざしていて、かつ学問的広がりをもたらすような明白な証拠を示しうるものでなければならない。前述の英語科のプライス先生の話では、このフィジカル・プロダクトの製作に、中には60～70時間も費やす生徒がいるらしいが、規定によって、最低でも15時間ほどの学校外でのワークが義務づけられている。さらに、製作の過程を明らかにするため、作品の場合は製作過程のさまざまな段階を写真に収めること、パフォーマンスの場合はシニア・プロジェクトの発表以前に観客からの一定の評価を得ていること、そしてその他の研究の場合はきちんとした学問的裏付けがあることなどが求められている。

3. ポートフォリオを作成する。

生徒は、シニア・プロジェクトの取り組みの過程が評議委員たちにわかるように、ポートフォリオ（書類ばさみ）を作成しなければならない。規定によると、このポートフォリオには、以下のものが含まれていることが求められている。

- Cover Page
- Table of Contents
- Professional Section
- Research
- Physical Product
- Dated Journal / Reflection Entries

- Reflections Statement

4. 正式なプレゼンテーションの場を持つ。

最初の9週間の最後に、3～5分程度の中間発表を行い、英語科の担当教員から指導、助言、評価を受けるが、フィジカル・プロダクトの製作やポートフォリオの作成を経て、次の9週間の最後に、いよいよ最終的なプレゼンテーションを評議会の前で行うことになる。時間的には8分～10分の発表だそうだが、評議委員たちは、事前にポートフォリオに目を通し、発表後には質疑応答が行われるそうだ。

3) 評価

レイニー高校では、以下のような評価規定がある。

1st NINE WEEKS

- 20% Notebook (Collection of Homework And Classwork Assignments)
- 45% Tests, Essays, Reflections, Etc.
- 20% Rough Draft of Research Paper
- 15% Midterm Exam (3-5 Minute Speech on Research)

2nd NINE WEEKS

- 20% Notebook
- 20% Tests, Essays, Reflections, Etc.
- 20% Final Draft of Research Paper
- 20% Product
- 20% Portfolio

FINAL EXAMINATION /

BOARD PRESENTATION

- 25% of Semester Grade
- Only Real Senior Privilege (Excused from English Exam Day)

前述のように、最終的なプレゼンテーションは評議会の前で行われるが、この評議会は、英語科の担当教員1名、メンターと呼ばれる校内で選ばれた指導教官1名、地域社会の人3名の計5名で構成され、文法や表現方法については英語科の教員が、専門的な内容に関してはメンターが、そして地域社会の人3名が加わって、多角的に評価を下すシステムを採っている。

②守口北高校及びレイニー高校における国際交流に関するアンケート結果の比較

1) レイニー高校で実施したアンケート様式

Questionnaire about interests and experiences abroad

1. Have you ever been abroad?

Ans. (Yes / No)

※ Please answer the next questions in the case of "Yes".

What country?

Ans. ()

What did you do there?

Ans. ()

2. Would you like to participate in cultural exchanges with foreign schools?

Ans. (Yes / No)

※ Please answer the next questions in the case of "Yes".

What country?

Ans. ()

What could you do to exchange information with another country?

Ans. ()

3. Would you like to study abroad in your high school days?

Ans. (Yes / No)

What did you do there?

(students)

School	Sightseeing	Homestay
Moriguchikita		
Laney	10	1

2. Would you like to participate in cultural exchanges with foreign schools?

(%)

School	Yes	No
Moriguchikita		
Laney	50	50

What country?

(students)

School	Japan	France	Germany	China
Moriguchikita				
Laney	8	2	2	2

What could you do to exchange information with another country?

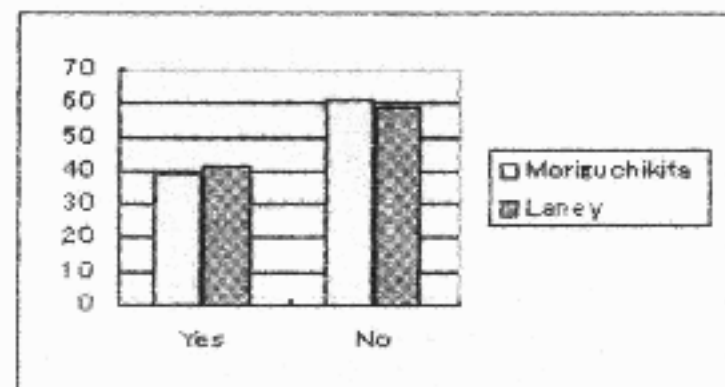
(students)

School	Internet (E-mail)	Exchange of Students	Letters
Moriguchikita	18	12	0
Laney	6	0	3

3. Would you like to study abroad in your high school days?

(%)

School	Yes	No
Moriguchikita	39	61
Laney	41	59



How long?

(students)

School	2 weeks	1 month	1 year
Moriguchikita	7	10	4
Laney	4	4	1

What country?

(students)

School	USA	Australia	England
Moriguchikita	19	10	4
Laney	Japan 6	France 3	1

What do you want to study there?

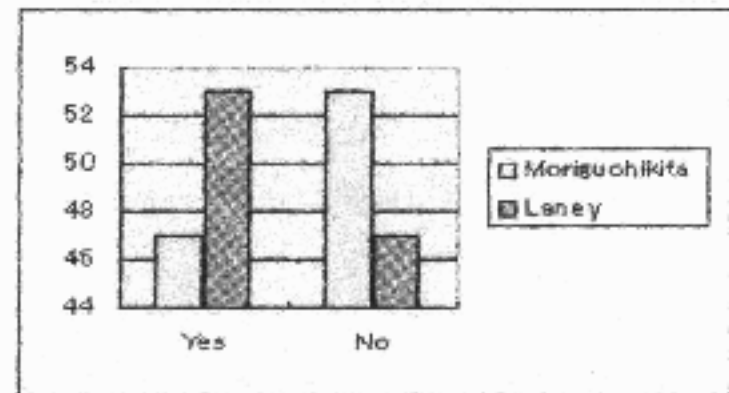
(students)

School	Culture
Moriguchikita	
Laney	6

4. When foreign students come to study at your school for a short time, do you want them to stay with you?

(%)

School	Yes	No
Moriguchikita	47	53
Laney	53	47



5. Would you like to visit foreign countries in the future?

(%)

School	Yes	No
Moriguchikita		
Laney	91	3

What country?

(students)

School	USA	Australia	Korea	Japan	France	Italy
Moriguchikita	51	24	13	0	10	4
Laney		7	0	17	7	7

What do you want to do there?

(students)

School	Sightseeing	Study of Culture	Explore
Moriguchikita			
Laney	15	7	3

3) 考察

レイニー高校におけるサンプル数が32と少ないので、断定は難しいが、上記のアンケート結果から、次のような傾向があると言えるのではないだろうか。

1. 海外旅行経験者の割合は、レイニー高校の生徒の方が格段に高い。

今年開校したばかりの総合学科、芦間高校の1年生196名を対象に行った調査でも、海外旅行経験者の割合は18%止まりであり、レイニー高校の34%は極めて高い数値と言えよう。

2. 外国との情報交換の手段として交換留学を挙げる生徒が、守口北高校にはいるが、レイニー高校にはいない。

外国との情報交換を行うためにできることは何かという問いに対して、守口北高校の場合、交換留学を挙げる生徒が12名もいて、インターネットの18名に次いで2番目に多いが、レイニー高校の場合は皆無で、インターネットの6名に次いで多いのが、レターの3名である。

3. 高校時代に留学したいと思っている生徒の割合は、両校ともほぼ同じで4割程度である。

アンケート結果から明らかであるが、守口北高校生の39%、そして、レイニー高校生の41%が、高校時代に留学を希望している。

4. 高校時代に留学を希望する生徒が考えている期間は、2週間や1ヶ月間といった、短期留学である。

少数ではあるが、1年間という長期留学を望む生徒も守口北高校に4名、レイニー高校に1名いる。表には出ていないが、2年間の留学を考えている生徒がレイニー高校に1名いたことを付記しておきたい。

5. 留学先については、守口北高校の場合はアメリカを、レイニー高校の場合は日本を望む生徒が多い。

アンケート結果としてあがっている表に出ている数値から算出した、守口北高校の生徒がアメリカ留学を希望している割合は約58%であるのに対し、レイニー高校の生徒が日本への留学を希望している割合は60%で、いずれも第1位を占め、かつ第2位以下を大きく引き離している。

6. 自分の学校が外国人留学生を迎えた場合に、

短期ならホスト・ファミリーとして受け入れてもよいと考える生徒は、双方とも5割程度いる。

アンケート結果から明らかなように、守口北高校生の47%、レイニー高校生の53%がイエスと答えている。

7. 将来、どの国に訪れてみたいかという質問でも、守口北高校の場合はアメリカを、レイニー高校の場合は日本を望む生徒が多い。

この質問においてもやはり、守口北高校がアメリカを望む割合と、レイニー高校が日本を望む割合はいずれも第1位を占め、しかも第2位以下を大きく引き離している。

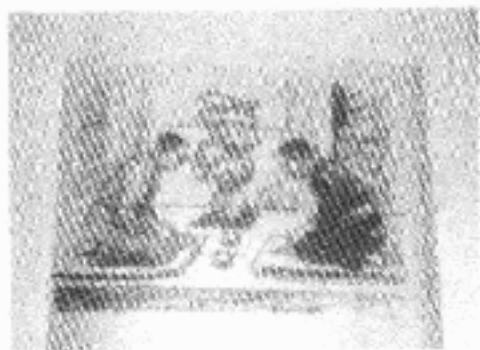
③学校改革へのキーポイントの研究

レイニー高校が、1999年度と2000年度の2年間にわたって、a "NC Exemplary School" に選ばれ、また、2001年度にはノースカロライナ州の高校の中でわずか2校にしか与えられていない a "Hallmark School of Excellence" に輝いた一番の要因について、レイニー高校の複数の先生に尋ねてみた。すると、社会科のアダムズ先生とホールデン先生は口をそろえて、ホリデイ校長先生に変わって以来、学校の重点目標をアカデミックな方向にシフトするように全職員に対して通達が行われ、職員会議の場で繰り返し指示を出した結果、職員が一致団結してその方向へ変える努力を行ってきたからだと説明してくれた。また、英語科のプライス先生も、ホリデイ校長先生に変わってから教育の方向が学力重視へと転換したと言った。職員会議で、校長の指針が教職員に対してはっきりと伝えられ、教員はそれを授業の場で実践するという図式が構築されているそうだ。別の教員に尋ねても回答はまったく同じであった。レイニー高校では、通常トップダウン方式で校長から指示が下りてきて、それを教職員は遵守していくようである。しかし、このようなシステムの採用は、何もレイニー高校に限られているわけではないように思われる。ノースカロライナ州全体が、ハント知事に替わって以来、教育改革の大きなうねりに巻き込まれたと聞く。知事というトップが下ろした指示を、傘下にいる職員全体が忠実に守り、実行していく。個人個人ではなく、常に組織として動いていくところに、大きな変動を受け入れ、改革を断行していく素地があがっていると感じずにはいられないのである。

④20年以上昔の米国等の教科書における日本文化紹介記事と、現在のそれとの比較

1) 20年以上昔の米国等の教科書における日本文化紹介記事

1.



床の間に座る日本人? (フィリピン, 1972)

2.



ぞうりを履いてお正月? (カナダ, 1974)

3.



書道は横向きを書く? (イギリス, 1975)

4.



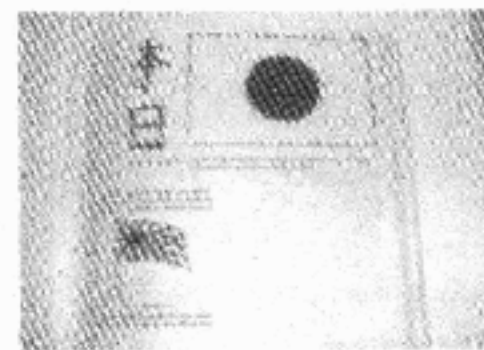
自転車タクシーが走る? (アメリカ, 1972)

5.



ワニに乗った浦島太郎? (レバノン, 1968)

6.



本日って?日の丸に菊? (アメリカ, 1981)

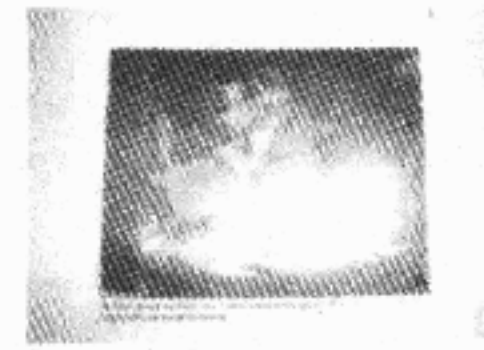
2) レイニー高校で現在、使用されている世界史の教科書における日本関連の記事

1.



山伏はmamabushiと読むの?

2.



12世紀頃の戦場の侍

3.



中国人を身体検査する日本軍兵士

4.



電子産業で働く日本人女性

3) 考察

レイニー高校で現在使用されている教科書における日本関連の記事や、図書館に収められている日本に関する教育資料を見せてもらい、約20年前（1983年）に日本で発行された「海外の教科書にみる異国ニッポン・グラフィティ」（編集協力：財団法人 国際教育情報センター、発行：ジャテック出版）の記述と比較・検討し、この20～30年間における日本文化の紹介に関する変化について考察するという、第4番目のパーソナル・プロジェクトは、結論から言うと、残念ながら、十分に検証できないままに終わってしまった。レイニー高校のオールソン先生にお願いして、日本文化の紹介、いやそこまでいなくても、日本のことについて少しでも扱っている教科書をということでピックアップして頂いたのだが、唯一、かろうじてその条件を満たしているのが世界史の教科書であった。しかし、中身を見ても、私の期待とは裏腹に、日本文化の紹介に関連した写真や絵はその数が極めて少なく、検証するには余りにも資料不足であった。ただし、1カ所だけではあるが、記述の誤りを発見した。それは、上記の2)の1.に載せているように、山伏を mamabusi と読むと書かれていた点である。以下に、英文をそのまま記しておく。

Mountain priests, called mamabushi, participate in a traditional Japanese Shinto ritual.

さらに、日本の文化がまだまだ間違っただけで伝えられたままになっている例が、直接私自身が見つけたものと、今回の米国研修と一緒に大阪地区から参加した他の先生から報告を受けたものを合わせると合計3つあったので、ここに記しておきたい。その1つは、8月23日（金）、教具などを扱っているTeacher's Aidへ寄った際に、料理関係の本のイラストの中で私が見つけたもの

だが、そこに登場した日本人の女の子が靴らしきものを履いたまま正座していたのである。もう1つは、ヴァージニア・ウィリアムソン小学校に行かれた先生の報告であるが、書籍の中に、着物は江戸時代で、髪は明治時代の結い方をした、何とも形容しがたいおかしい日本人が登場していたそうである。さらに、トップセイル・ミドル・スクールへ行かれた先生からも、これと似たような記述を見たという報告があった。以上のことから、20年以上昔と同様に、日本の文化が正しく伝えられていないままになっている点はかなりありそうだという危惧を覚えるのである。

(4) 今後の展望

今回の米国ノースカロライナ州訪問における最大の収穫は、何と言ってもレイニー高校との姉妹校提携が成立したことである。今年4月に総合学科として誕生したばかりの芦間高校にとって、レイニー高校は大先輩として、教えを請う点が数え切れないくらいあると思われる。とりあえず、できることから早急にということで、以下の3点を実施に移していきたい。

1) 本校のESS部と、レイニー高校のインターナショナルクラブとの間で、まずはE-mailを通して生徒間の交流を進めたい。

2) 芦間高校で来年度開講する「英作文応用」あるいは「異文化理解」において、E-mailを通してレイニー高校と情報交換を行い、授業に役立てたい。

3) レイニー高校を含めて、ノースカロライナ州の高等学校で実施されているシニア・プロジェクトについて一層の理解、研究に努め、完全な形で取り込むのは難しいとしても、部分的にでも何とか生かすことができるよう、模索していきたい。

(5) 終わりに

3回にわたる事前研修、並びにレイニー高校への訪問を通して、ノースカロライナ州の教育改革の大きなうねりを肌で感じる事ができた。Accountability、Basic、local ControlのいわゆるABC政策に始まり、Achievement Level IIIでthe High Growth standardsを達成した学校の教職員に対し、最高1,500ドルまでのボーナスが支給されたり、また、逆に達成度の低い学校は教育委員会の指導重点対象校となるなど、教育委員会が学校自体に評価を下す一方で、教職員に対して

も、免許の更新制度を導入して研修を義務づけるなど、徹底した管理体制を敷いているといったことまで、日本とは随分異なる点を、自分の目で確かめることができた。しかし、日米の間で求められる事柄に差はあれど、同じ教師として、生徒に対して健やかな成長を願うと同時に、将来、地域を、そして国を背負って立つような有為な人材に育ててほしいと思う気持ちに変わりがないことも確認できた。今後、日米の双方にとってより良い教育とは何かということを念頭におきながら、レイニー高校と意見の交流を図っていきたい。

グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトに参加して

大阪府立花園高等学校 教諭 片岡雅子

1. グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトと花園高校

私の勤務している大阪府立花園高校は東大阪市にあり、今年40周年を迎える高校である。昭和37年設立当時は普通科のみ的高校だったが、平成4年に国際教養科が設置され現在に至っている。各学年普通科5～6クラス、国際教養科2クラス、生徒数919名、職員数65名の普通規模の学校であり生徒のほとんどは大学や専門学校などへの進学を希望している。

国際教養科の生徒は女子が約3分の2を占め、英語を通して外国のことを学んだり、英語を使って外国の人たちと交流したいと思って入学してくる生徒が多い。本校は夏休みにハワイ大学サマープログラムとオーストラリア語学研修の2つの語学研修プログラムを持ち、また春休みにはアジアスタディーツアーを行うなど、国際教養科の生徒だけでなく、普通科の生徒にも外国との交流の機会を多く与えられるよう配慮している。また毎年様々な国から複数の留学生を受け入れ、生徒達は留学生と10ヶ月間机を並べて勉強することで、身近に外国(異文化)を経験できる環境にある。

本校の桂田先生が2000年度の米日財団奨学金プロジェクトの本プログラムに参加され、その時ノースカロライナ州ウィルミントンのJohn T. Hoggard高校と姉妹校提携をすることを打診された。そして昨年6月にはHoggard高校のAnderson校長、Whitehead先生、Scott Urban先生の3人が本校を3日間訪問された。Whitehead先生がパワーポイントを使ってアメリカ史についての授業をされた他、施設見学・授業参加・放課後のクラブ活動見学・職員会議の傍聴など精力的に行動され、まさに『花高のすべて』を知りたいという熱意が感じられた。最終日にはHoggard高校と花園高校の姉妹校調印式が行われた。4月に本校に赴任し国際部に所属していた私は経緯もよくわからないままこの歴史的な瞬間に立ち会うことができ、感動を覚えたものだった。

花園高校に赴任してまだ1年目の私がこのプロジェクトに参加できたのはまったくの幸運だったと思うが、

さて個人としてのプロジェクトを何にするかとなるとなかなか決まらず困った。6月に姉妹校提携を結んだとはいえ、Hoggard高校とのパートナーシップをどのように継続発展させていくかということが花園高校としての課題であると考えていたのでこれを第一のプロジェクトにすることにした。その他、国際理解教育や外国語教育が小・中・高校の各段階でどのように行われているか観察・研究したいと考えた。

2. Williston Middle School, Gregory Elementary School, Eugene Ashley High Schoolを訪問して

(1) Williston Middle School

Williston Middle SchoolではWilliam Hatch校長に出迎えていただき、10分刻みの精密なスケジュールで7つの授業を見せていただいた。この中学校は生徒数900人(人種構成はwhite 55%, black 42%, Hispanic 3%)、職員60人の規模でありながら各教室に5台のコンピューターがある。パンフレットにはWilliston Middle School of Math Science & Technologyと書かれてあるようにニューハノーバー郡の中学校の卒業に必要とされている8年生で行われるComputer Competency Testに欠かせないtechnology skillsを教えるのに力を注いでいる。確率の授業では紙飛行機を飛ばし、飛行距離を測る授業や、英語の遅れている生徒のためのEnglishの授業が4人の少人数で行われていたのが印象的だった。また校長がいつもハンデイトークのようなものを持っていて、常に校内で起こっていることを把握しているなど校長のリーダーシップが強く発揮されていることが強く印象に残った。

(2) Gregory Elementary School

Gregory Elementary Schoolは生徒数565人、公立のmagnet schoolである。magnet schoolには学区や入学試験は無く、応募者の中から抽選で入学者を決めるとのこと。ここでも各クラスにコンピューターが5台あり、情報教育が小学校の段階から重視されてい

るのがわかった。ニューハノーバー郡の23の小学校ではCharacter Education(日本の道徳教育がもっとも近い?)に取り組んでおり、パンフレットには Courage, Good Judgment, Integrity, Kindness, Perseverance, Respect, Responsibility, Self Discipline の8つのNorm(規範)が挙げられている。どの教室にも授業のルールが張り出され、『してはいけないこと』『しなければならないこと』が明示されている。Mathの授業では、説明が全体説明のみでついていけない生徒もいるのではと思ったが、生徒は総体に先生の言うことをよく聞く。well-manneredというよりも well-trained という感じでトイレにも食堂にも一列に並び行儀よく先生に引率されていく。

(3) Eugene Ashley High School

Hoggard High School が大きくなりすぎたため、2001年に開校された生徒数1600、教員80人ほどの高校である。ベトナム戦争で数々の功績を上げ14もの勲章を受章し、37歳の若さで戦死したEugene Ashleyにちなんで名づけられている。この高校のマスコットのscreaming eagleは101空挺部隊にちなんだものであり、シンボルカラーであるゴールド(金色)は“陽気さと力強さ”を、ガーネット(深紅色)は“威厳と歓喜”を表している。

ここでは4つの授業を観察させていただいた。mathの授業では新学期が始まったばかりだったので、ノートの取り方・評価方法の説明がされていた。Design LabではClothing Designの授業が行われており、日本の高校でも行われているステッチ(縫い方)の実習中であった。評価は、授業参加10%、テスト30%、プロジェクト30%、portfolio(作品集)20%、ノート10%というやり方で、日本と同じような評価方法だった。各クラスの生徒数は27から28人と日本に比べ少数だった。

3. Hoggard高校へ

花園高校の姉妹校であるHoggard高校は、生徒数1,650人、職員150人という大規模高校である。昨年8月花園高校から校長他2人の教員がHoggard高校を訪れており、その報告会で話を聞く機会があったので、ある程度の予備知識はあったが、その1つはViking TV(校内放送テレビ)での挨拶であった。その前日はミーティングの後、ホテルで英語の挨拶を何度も練習した。当日の朝は『今日はテレビに出るんだからテ

ンションを上げなくては』と自分を叱咤激励して迎える車を待った。libralianのMs. Woodardの車に乗せていただき初登校。とても緊張したが校舎にWELCOME KATAOKAの掲示を見つけ感激。生徒達は8:00過ぎからスクールバスで続々と登校してくるが、校舎が開くまでは友達と話しながら中庭などで待っていたり、8:00から開いているMedia Center(図書館)では早朝の個人補習を受けたり自習している生徒もいるが、おおむね生徒はみな静かで落ち着いているというのが第一印象である。

(1) TV productionの授業

Media Centerの隣にあるビデオルームで、11人の生徒が1週間交代でカメラマン・キャスター・プロデューサー・原稿作成などの役割を分担し、その日の休み時間に放送する7分くらいのテレビ番組を作成・放送するというもの。スタジオは決して広くはないが立派な設備で、1時間目と2時間目の間の7分間の休み時間を利用しての放映に向けて、生徒はしっかり各自の役割をこなし緊張感あふれる授業だった。

(2) NJROTC(Naval Junior Reserve Officers Corps)の授業

これは『海軍予備兵役準備訓練』ともいうべきもので、この日は外部からのゲストを招きビデオを観て、話を聞くという授業だった。NJROTCは9年生から12年生(高校1年から4年)まで週5時間ずつあり男女どちらも受講できる。目的は『国家の安全に必要な知識を身につけ愛国心を養う。そのために必要な基礎的な知識を学び訓練を行う』ということで、この日のクラスは女子の方が多かった。NJROTC II以上を修了した生徒はMARKSMANSHIP AND HUNTER SAFETY(射撃)を取ることも出来る。

またAIRFORCE(空軍)では航空学、航空宇宙科学など6つの講座が開講されている。先生は制服姿で『横須賀、長崎、呉に行った事がある』というまさに軍人上がりの人達であり、さしずめ日本に当てはめれば自衛隊の元隊員が制服姿で授業を受け持っているという光景である。他にもSchool Police(Sheriff)が3人常駐しており、フットボールの試合を観戦した時も彼らが詰めていた。学校の中に制服を着た警官がいるということに強い違和感を憶えると同時に、そうせざるを得ないことにアメリカの教育の厳しさを見たように思った。

(3) スペイン語の授業

第4限はスペイン語の授業を参観させていただいた。生徒数は24人。外国語の授業はもっとクラスサイズが小さいことを予想していたが、これくらいで普通とのこと。level 3の生徒で『音とスペリングの関係』の授業。先生はネイティブの先生ではないが、なるべくスペイン語で指示を出し机間巡視をこまめに行なっているのは英語教師の私にとって参考になった。

(4) Hoggard 高校全般の印象

授業中生徒はよく先生の指示を聞き、勝手に発言したり私語したり、ましてや机につぶして寝る生徒はいない。少しざわざわすると先生がすぐに「シーッ」といって生徒の注意を促すということもあるが、日本の高校生に比べ落ち着いており、授業の秩序がよく保たれている。そして先生の発問によく反応し、意見を求められれば手を挙げて指名されるのを待つ。

日本の高校生は(学校にもよるが)総じて子どもっぽく、我先に発言したがるかと思えば意見を求められても誰も何も発言しない光景がよく見られる。また授業中に机に伏せ寝していくら起こしても起きない生徒がいたりするが、アメリカ(少なくともHoggard高校では)では「授業中寝る」ということは許されない行為だと生徒達は理解しているようだった。

Hoggard高校ではちょうど新学期が始まったところで、授業中に科目選択についてカウンセラー(各学年一人ずついる)と相談している生徒もおり、また遅刻指導を専門にする先生もいるなどスタッフの役割り分担・分業化が進み、教師は「授業のプロ」という認識が浸透しているようであった。

アメリカは80年代の教育改革以来 Academic な分野(学力)を重視してきているが、Hoggard高校でも授業時間の確保のため90分授業を一日4時間・休み時間7分という時間割だった。昼休みもCafeteriaの収容能力の限界もあるが2交代制を取るなど「学校は勉強の場である」ということが強調されていた。

4. 姉妹校提携の今後の在り方を探る

今回、私のHoggard高校訪問の最大の目的は、昨年6月に提携した姉妹校 Hoggard 高校とどのような形でこれからパートナーシップを継続・発展させられるか、その手がかりをつかむこと、できれば具体的な形でアイデアを得たいというものであった。

そこでまず花園高校について Hoggard の生徒やスタッフの人たちに広く知ってもらい関心を持ってもらおうと考え、花園高校の生徒の協力で作った「花高紹介ビデオ」と生徒のメッセージも寄せた「手作りアルバム」を持参した。

(1) 花高紹介

花高紹介とともに「日本についてもっと知りたい」、「本当の日本を知るところから交流は始まる」という考えで、日本紹介を5クラスで行なった。日本の地理・気候風土・文化などについて地図やクイズを使って紹介した。風呂敷・納豆・梅干・そろばんなど実物を持って行き、体験してもらいながら日本人の食習慣やさまざまな文化・考え方を紹介するのはとても楽しく、生徒達もよく反応してくれ大変盛り上がった。なかでも一番受けたのは「ルーズソックスの正しいはき方」で、女子生徒だけでなく男子生徒もルーズソックスにチャレンジし、「なぜ日本の女子高校生は毎朝貴重な時間を使ってルーズソックスを気に入るようにはくのに熱心なのか」、いくらかは? 理解してもらえたようだった。生徒達は日本の高校生にとっても関心があり活発な質問が出たが生徒の英語がよくわからず冷や汗物であった。

ある男子生徒に「足の裏を他人に見せるのはbad mannerですか?」という質問を受けた。どういうsituationでの事かよくわからなかったが「前にそんな事を聞いたことがあったので」とその生徒は言っていたが、私たちのアメリカに対する知識も同じようなものだろうと考えさせられた。

また「私たちは日本人にとって皆同じように見えますか」と尋ねた女子生徒がいた。Hoggard高校では圧倒的にwhiteが多くblackの生徒は少なかった。それでも髪の毛の色・目の色など様々であり「同じ様」には見えなかった。「日本人は同じ様に見えますか?」と尋ねると「Yes」の答えが圧倒的だった。「だから今日本の高校生の間では西洋人のように金髪や茶髪にあこがれて染髪する生徒が多い」と話すと、Hoggard高校でも染髪している生徒がいる(校則では禁止されている)という先生の話で、どこでも若者は同じ(kids are kids)と納得したものだった。

(2) 日本文化の紹介

Artの授業でCalligraphy(書道)の授業をしてほしいという依頼で3クラスで授業をさせてもらった。内

容は次のようなものだった。

1. 日本人の心身の調和と書道との関連について
2. 日本ではなぜ書道は芸術なのか
3. 英語のアルファベットと比較して日本の文字についての説明
4. 筆、硯、墨の使い方の実演

書道の準備はあまりしていなかったもので、一緒に参加していた小学校の先生がHost familyへのお土産として持参されていたうちわを拝借し、そこに大書されてある『大』の字を教材に選んだ。

高校の芸術選択で習って以来触れる機会の無かった筆だったが、『まず姿勢を正し神経を集中させて、墨をゆっくりと時間をかけて磨るのが大切であること、』『“大”は広さ・宇宙(space)につながるのだからゆっくりと大きくのびのび書くのが良い』などと昔習ったことを思い出しながらの授業だった。日本語では漢字・ひらかな・カタカナの3種類の文字があること、日本の学生は漢字をたくさん覚えなければならず大変だが、漢字は表意文字なので一旦覚えると一目で意味がわかるので便利であることなど、参観にこられた大教大の米川教授にも助けて頂きながらの楽しい授業になった。その後は生徒に名前をカタカナで書いてあげたが、漢字ではないので少々不満げな生徒もいた。アメリカの高校生には漢字がかっこいい(cool)と受け止められているようだった。

前に述べたスペイン語の授業でも再度日本紹介の授業をさせていただくことが出来た。ここでは日本語の文字と発音の練習をしたり、持っていった千代紙で折り鶴を作ったりして楽しく日本紹介をさせてもらった。これならもう少しちゃんと準備をすれば、定年後海外で日本紹介が出来るかもしれないという考えが脳裏をかすめた。今回日本文化の紹介を考える上で、なるべくさわったり、食べたり、体験してもらえものを持っていくことを年頭において準備した。これは生徒の注意をひきつけるには効果的だったが、なぜそうなのか・日本人の考え方や行動とどのように関係があるのか、というような内面的なことや、もっと経済・政治・社会面でもしっかり勉強しておけばよかったというのが私の反省である。

(3) 授業の交流について

昨年6月に本校に来られたScott Urban先生が10年生(高校1年)のWorld Literatureで昨年日本の『夏

の庭(Friends)』を教材に取り上げられた。しかし本校では授業では取り上げなかったので希望者が放課後など自由にメールをやり取りすることに終わり、内容を深めるところまで行かなかったと聞いていた。そういうわけで共通に取り上げられる良い教材を模索するというのが今回の訪問の目的の1つでもあった。事前に用意した講談社英語文庫などの興味を持ってそうな教材のリストや、手に入った英文教材も持参した。また昨年はHoggard高校より送られてきた英語俳句にメールで返事を出すなどの授業も行なわれている。今後国際理解の授業や英語・国語の授業などで、カリキュラムの一部に組み込んだ活動に発展していくものと考えている。

今回は3日間の訪問であり、ゆっくり授業や教材の交流について話せる時間が無かったのは残念だが、色々な先生方と直接お会いして話しをする機会を与えられた。おかげで相互理解が進み、帰国後『夏の庭』や日本の古典芸能のビデオテープを送るなど交流は進んでいる。学校間のパートナーシップとは言ってもやはり多くのスタッフ個人同士のしっかりしたつながりがないにより欠かせないと思う。

5. 日米高校生の比較

かねてから日本とアメリカの高校生の意識の違いに興味があったので、この機会を活用し主に『学校生活に関するアンケート』を実施させていただいた。

以下はその項目と主な回答をピックアップしたものである。

花園高校 106名(男33, 女73 普通科1クラス、国際教養科2クラス)

Hoggard高校 56名(男30, 女26)

いずれも15~16歳

これはあくまでも大阪の花園高校とアメリカNorth-Carolina州のHoggard高校の比較ではあるがいくつかの興味深い点に気付いた。

Q4・5・11より

Hoggard 高校の生徒のほうが家での勉強時間は長く、“良い成績を取ること”、“大学へ進むこと”を学校生活の目標と考えている生徒が多い。

Q6・7・10より

放課後や週末は花高・Hoggard高校生とも友達と遊ぶのを楽しみにしている(Hoggard高校でbeachやgo

	アンケート項目	花園高校		Haggard高校	
Q 1	好きな学科は?	英語	39.0%	英語	26.8%
Q 2	嫌いな学科は?	数学	61.0%	数学	33.9%
Q 3	宿題は多いと思いますか?	はい	68.6%	はい	80.3%
Q 4	毎日家でどれくらい勉強しますか?	30分以下 (0も含む)	57.1%	30分	36.4%
				1時間	23.2%
Q 5	なぜ一生懸命勉強しなければいけないと思いますか?	将来役に立つ	25.7%	良い成績を取るため	35.7%
		世のため人のため	14.3%	大学に入るため	25.0%
		知識を身に付けるため	12.4%		
Q 6	放課後は何をしていますか?	クラブ	36.2%	スポーツ	33.9%
				クラブ	26.8%
Q 7	週末は何をしていますか?	友達と遊ぶ	42.9%	友達と過ごす	53.6%
Q 8	学校で困ったことはありますか?	なし	61.0%	なし	73.2%
Q 9	学校で困ったことがあれば誰に相談しますか?	友達	66.7%	家族	62.5%
		家族	23.8%	友達	26.8%
Q10	学校生活で一番楽しいことは何ですか?	友達としゃべる	50.5%	友達と会う	44.6%
Q11	学校生活で一番大切なことは何だと思いますか?	友達と遊ぶ	32.4%	良い成績を取る	41.4%
		勉強	16.2%	良い教育を受ける	12.5%
Q12	学校生活について保護者がよく言うのはどんなことですか?	勉強しなさい	51.4%	一生懸命勉強しなさい	23.2%
		何も言わない	19.0%	全力を尽くしなさい	21.4%
Q13	最も尊敬する人は誰ですか?	親	34.3%	親	71.4%
Q14	高校を卒業したら何をしたいですか?	大学へ進む	64.8%	大学へ進む	64.3%
Q15	あなたの夢は何ですか?	なし	23.8%	プロのスポーツ選手	7.1%
		音楽関係	4.8%	金持ちになる	5.4%
		英語関係	4.8%		
Q16	携帯電話を持っていますか? 持っていたら毎月どれくらい払っていますか?	持っている	89.5%	持っている	42.9%
		5,000円	23.8%	お母さんが払っている	
		10,000円	19.0%		14.3%
Q17	アルバイトをしていますか?	している	21.9%	している	16.1%

on boat と答えた生徒が結構多いのは大西洋に近いという土地柄であろう。

Q 9・13より

学校で困った事があった時相談する相手として：花高では（親 23.8%、友達 66.7%、先生 11.4%）であり、Haggard高校では（家族 62.5%、友達 26.8%、先

生 19.6%）となっている。また最も尊敬する人として花高では（親 34.3%）なのに対し Haggard 高校では（親 71.4%）となっており、Haggard高校の生徒は“親を困った事があれば相談できる存在として尊敬している”ということができよう。

Q14・15より

高校卒業後の進路希望はどちらも大学（短大）への進学が60%と多いが、将来の夢について花高生の23.8%が“なし”と答えているのは興味深い。

Q16・17より最近の日本の高校生の必携アイテムともいえる携帯電話だがHoggard高校生の57.1%が持っておらず、持っている場合も“料金は母親が払っているのでわからない”と答えている生徒が14.3%だったのは予想外だった。またアルバイトについても83.9%が“やっていない”と答えていたのは“アメリカの高校生はアルバイトをしてデートの費用などは自分でまかなっている”と思っていた私にとってとても驚きだった。

Q18 “日本についてあなたが知っていることを書いてください”という問いについて多かったのは

- * 小さい島国で人口が多い
- * 首都は東京
- * 第二次世界大戦で爆撃を受けた
- * 国旗は日の丸
- * 科学技術の国

などであったが

* おもしろそうなのでそのうちに行ってみたいという生徒も何人かいた。

6. この研修で得たものと今後のあり方

(1) 複数のコンタクトパーソン

今回は8月の新学期開始早々という多忙な時期でありながら、授業見学だけでなく花高紹介・日本紹介・教材の交流など個人的なプロジェクトをすべてこなし、充実した研修が出来たのはお世話してくださるコンタクトパーソンが数人おられた事が大きいと思う。学校間のパートナーシップも基本はやはり人と人の付き合い、つながりが大切で、学校全体の交流にするには複数のコンタクトパーソンが是非必要と感じた。

(2) 生徒の交流

Japanese Clubはまだ正式に活動しておらず活動の準備中ということであったが、2人の男子生徒TimとOsamuと話すことが出来た。Timは日本に興味があり『源氏物語を少し読んだ。黒澤の映画をよく見ている。日本に行きたい』という少年。Osamuはお父さんが日本人の陶芸家で6月には日本に行ってきたという少年で、日本の大学に進みたいという希望を持っている。

本校では現在も2人の留学生を受け入れており、TimやOsamuのような生徒が本校への留学を希望するならば制度的には受け入れは可能である。ただし財政的な面での裏付けが無いのが現状である。

(3) 語学研修プログラム

本校で夏休みに行なっているハワイ・オーストラリア語学研修プログラムを将来的にはノースカロライナ州立大学やHoggard高校と提携して行なうことも考えられよう。ただし7月末から8月半ばまではアメリカでも夏休みなので語学研修には不向きであり、またノースカロライナは地理的にも遠いという難点がある。

(4) カリキュラムに組み入れた国際理解につながる交流を

本校では昨年の『夏の庭』や俳句プロジェクトなどの実践をもとに、さらに多くの教科で取り上げていくことが必要と思う。単に2校間の交流だけでなく広く国際理解へと発展させられたらよいと思う。

(5) 互いに良いところを取り入れられる関係に

わずか3日間の訪問であり、アメリカという大きな国のHoggard高校という限られた経験でしかないことを理解した上で、日米高校の違いについて私見をまとめたのが以下のものである。

日本……………1) 生徒はのびのびしている
(緊張感があまり無い)

2) ホームルーム・学校行事・クラブ活動などを通しての生徒同士のつながりを重視

3) 全人的な教育を目指し、学級担任を中心に生徒の様々な面に関わっていく

アメリカ…1) 授業秩序がよく保たれており生徒は教師の指示によく従う

2) 教師は授業のプロであり教科指導中心

3) カウンセラー・School Police など様々な職種の人たちが生徒にかかわり、校長が強力なリーダーシップを取って学校運営の方針を打ち出している

教育を取り巻く環境や社会的状況が違うのでどちらが良いとは簡単に言えないが、お互いの良いところは取り入れ悪いところは改めるという関係が真のパートナーシップと言えよう。そのためにはこのプロジェクトの目指すものが、校長や一部の教職員だけでなく全職員に理解され共通認識が出来ることが重要であると考える。